



経営論集

Vol. 7, No. 4, March 2021, pp. 1-11

ISSN 2189-2490

■ 論文 ■

初年次教育科目における評価妥当性と 心理的要因の影響の検討

森 一 将
橋 本 貴 充
大 江 朋 子

要旨

本研究では私立大学経営学部の初年次教育科目を対象として、学校生活スキルとパーソナリティー特性の関係性、成績評価の妥当性を明らかにし、加えてオンライン面接方式を用い、大学入試における面接評定とパーソナリティー特性の関係性を示唆する。また、これらの結果に基づき、大学初年次教育科目における必要な授業プログラム、及び妥当性の高い成績評価方法について考察を行う。

キーワード：初年次教育科目、学校生活スキル、パーソナリティー特性、評価妥当性

(投稿日2021年1月31日)

文教大学経営学部

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

Tel 0467-53-2111(代表) Fax 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

初年次教育科目における評価妥当性と 心理的要因の影響の検討

森 一 将*
橋 本 貴 充**
大 江 朋 子***

1. はじめに

本研究では私立大学経営学部の初年次教育科目を対象として、学校生活スキルと関連する心理尺度の関連性、及び初年次教育科目の成績評価の妥当性を明らかにする。加えてオンライン面接方式を用い、大学入試における面接評定とパーソナリティ特性の関係性を検討する。

初年次教育科目とは主に大学1年生が入学直後に履修する導入科目のことであるが、河合塾(2010)によると、その目的は以下の様な8つの目的があると言われている。

- ① 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつくる。
- ② 高校までの不足分を補習する。
- ③ 大学という場を理解する。
- ④ 人としての守るべき規範を理解させる。
- ⑤ 大学の中に人間関係を構築する。
- ⑥ レポートの書き方、文献探索方法など、大学で学ぶためのスタディスキルやアカデミック

クスキルを獲得する。

- ⑦ クリティカルシンキング・コミュニケーション力など大学で学ぶための思考方法を身につける。
 - ⑧ 高校までの受動的な学習態度から、能動的で自律的・自立的な学習態度への転換を図る。
- これらの目的は高等教育機関であり、かつ企業や官庁等の組織体において専門的スキルを基に社会に貢献する人材を育成することを主な目的とする大学での学修において基盤になるものである。大学入学後の早い時期に初年次教育科目を通してこれらの目的を達成し、専門家育成のための教育を受けるにふさわしい大学生として成長することは、今日の高度化かつ複雑化した社会に対応する大学教育において要となるものであり、今後も初年次教育科目の重要性は向上していくと考えられる。本研究ではそのような初年次教育科目に影響する要因を心理学的知見とデータサイエンスを基に明らかにすることにより、今後のカリキュラム改善・ファカルティ・ディベロップメントに貢献していく。

ところで、初年次教育科目に関する心理尺度として「学校生活スキル」というものが存在する。これはもともと中学生が学校生活を送るうえで会うことが予想される、発達しつつある

* 文教大学 経営学部

✉ morik@bunkyo.ac.jp

** 独立行政法人 大学入試センター 研究開発部

*** 帝京大学 文学部

個人として出会う課題である発達課題と、学校というコミュニティの中で生活するものとしての課題である教育課題に対処するスキルとして定義され、関連する心理尺度が開発されてきたが（飯田・石隅2002, 2006）、その本質は上記の8つの目的と同等のものである。現に、我々が過去に行った調査においては大学の学修においても学校生活スキルは大学における目的達成に関して重要な影響を与えることが示されている。¹⁾したがって、初年次教育科目における達成度を評価する指標としてこの学校生活スキルを導入することは、適切なものである。2節で詳しく説明するが、本研究でも初年次教育科目の妥当性評価の基準としてこの学校生活スキルを用い、授業における課題に関する成績評価の妥当性を探っていく。

また、本研究ではこれらの初年次教育科目の達成度合いに影響を与える心理的要因としてパーソナリティー特性を導入する。パーソナリティー特性とは人間の持つ行動や思考、感情の傾向をいくつかの傾向に分類したものであり、心理学の分野ではBig Fiveモデル（パーソナリティー5因子モデル）（Tupes et al. 1961, Costa et al. 1985, John and Srivastava, 1999）が主流として扱われている。このBig Five理論で提唱されている5つのパーソナリティー特性とは以下の様なものである。なお、このモデルは5つの特性の頭文字をとりOCEANモデルとも呼ばれる。

- 開放性（Openness to experience; O）：芸術、感情、冒険、珍しいアイデア、好奇心、そして多様な経験への感謝、知的好奇心、創造性、そして人が持つ目新しさや多様性を好む度合い。
- 勤勉性（Conscientiousness; C）：組織化され

信頼できる傾向、自己コントロール能力を示す傾向、忠実に行動する傾向、達成を目指す傾向、自発的な行動よりも計画的な行動を好む傾向。

- 外向性（Extraversion; E）：活力、興奮、自己主張、社交性、他人との付き合いで刺激を求める、おしゃべりであること。
- 協調性（Agreeableness; A）：他人に対して疑い深く敵意を抱くのではなく、思いやりがあり協力的である傾向。
- 神経症傾向（Neuroticism; N）：心理的ストレスを受けやすい傾向。

Big Fiveモデルと大学における成績や評価との関係は過去の研究でも示されており（例えば、森ほか, 2019, 森ほか, 2020a, b）、本研究が対象とする初年次教育科目でもこのモデルを導入することで、初年次教育科目の目的の達成に影響を与える心理的要因を統合的かつ科学的に説明することが期待される。

これらの心理的要因に加え、本研究ではオンライン面接形式による直感評定も導入する。直感評定とは、回答者の面接やレポート（記述）などを基に、経験を積んだ評価者が最低限の基準に基づき直感的な評価を行う形式をさし、幅広い分野で適用事例や理論化が進んでいる（Kahneman, 2011, Gigerenzer and Gaissmaier, 2011）。初年次教育科目の対象となる大学1年生にオンライン面接形式で直感評定を行うことは、大学入試における面接選抜を行う状況にほぼ近くなり、今後増えていくであろうオンライン面接形式の大学入試における評価妥当性の検証や評価に影響を与える要因の分析に貢献すると考えられる。このような形で本研究は、初年次教育科目の評価妥当性や心理的要因の分析に加え、将来の大学入試における試験方式に関す

る検討も行い、大学における評価・教育の全体に貢献していく。

2. 調査の概要

調査は2020年8月に私立大学経営学部の初年次教育科目受講者（1年生）22名に対して行われた。当該の初年次教育科目は2020年5月～8月にかけて行われたが、コロナ禍の影響で全13回の授業すべてをオンラインで実施した。全13回の実施事項は以下の通りである。

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：大学における情報システムの利用法
- 第3回：メールマナー（1）
- 第4回：メールマナー（2）
- 第5回：図書館ガイダンス
- 第6回：自己紹介と交流（1）
- 第7回：自己紹介と交流（2）
- 第8回：先生や先輩を知る・キャンパスの紹介
- 第9回：キャリアや夢を基にした目標の設定
- 第10回：企業研究
- 第11回：経営・経済記事の読み方
- 第12回：外部講師による講演（公認会計士）
- 第13回：全体のまとめ

回答者に対する調査項目の概要は以下の通りである。

- 学校生活スキルの調査：飯田・石隅（2002, 2006）による学校生活スキル尺度を用いた。この学校生活スキル尺度は以下の5つの下位尺度から構成されている。（カッコ内は略称）
 - ① 自己学習スキル：予習復習などの自宅学習や試験勉強を自律的に行うためのスキル
 - ② 進路決定スキル（進路決定）：進路決定や自分の現在の行動と将来の関係、自分の

行動に対する優先順位付けに関するスキル

- ③ 集団活動スキル（集団活動）：集団活動における協調性、集団活動における人との関わり、学修態度に関するスキル
- ④ 健康維持スキル（健康維持）：体調変化に対する対処、生活リズムのコントロール、ストレスに対するコントロールに関するスキル
- ⑤ 同輩とのコミュニケーションスキル（同輩）：友達や異性に対する態度やコミュニケーションに関するスキル

- パーソナリティー特性：パーソナリティー特性を Big Five モデルに基づいた日本語版10項目パーソナリティー尺度（Japanese version of the Ten-Item Personality Inventory; TIPI-J, Oshio et al., 2012）を用いて測定した。
- 演習課題の成績：授業の初回と最終回に大学生活に必要な自己紹介、スケジュール管理に関する課題を出題し、成績を評価した。
- 入学試験を想定したオンライン面接と直感評定：回答者にオンライン上から「本学への志望動機」「大学生活における意気込み」という2つのスピーチを実施してもらい、これを2名の大学教員が「対象となる学生は今後大学4年間で成長するか」という観点で直感評定した。

3. 主要な分析結果と考察

本節では2節で示された調査データを基に、5つの統計分析を行うことで、初年次教育科目に影響を与えるパーソナリティー特性、初年次教育科目の成績評価妥当性について検討を行う。

分析1：学校生活スキル尺度における下位尺度 同士の関係性

まずは、本研究で用いた心理尺度の関係性について分析する。

学校生活スキル尺度における5つの下位尺度（自己学習、進路決定、集団活動、健康維持、同輩）および学校生活スキル全体の関係性について分析する。下位尺度得点と全体尺度得点（合計得点）の相関係数を表1に示す。まず、表1に示された通り、全体尺度得点は5つの下位尺度得点と非常に高い有意の相関を持っていることが分かる。本来、この尺度はすでに先行研究の大規模な標本において検証が行われているため妥当性・信頼性の高いものであるが、本研究においても適切に利用できるものであることが確認された。また、各下位尺度得点の相関を見ても、自己学習－同輩間で有意な相関を持っていない以外はすべてにおいて有意な中程度～高い相関を持っている。したがって、本研究においてもこれらの下位尺度は個別に検討すると同時に、統合的なものとして扱うことも必

要であることが分かる。

分析2：パーソナリティ特性尺度における下 位尺度同士の関係性

一方でパーソナリティ特性尺度における相関係数（表2）をみると、5つの下位尺度（開放性、勤勉性、外向性、調和性、神経症傾向）には一部（外向性－神経症傾向間）を除いて有意な相関は見られていない。したがって、本研究においてもパーソナリティ特性尺度は下位尺度を個別のものとして扱うのが適切であることが分かる。

分析3：学校生活スキルにパーソナリティ特 性が与える影響

次にパーソナリティ特性が学校生活スキルにどのように影響を与えるかについて考察する。表3にパーソナリティ特性尺度と学校生活スキル尺度の間の相関を示す。まず、表3より学校生活スキルの全体尺度得点は外向性と有意で中程度の正の相関、神経症傾向を有意で中

表1 学校生活スキル尺度における下位尺度得点、全体尺度得点間の相関係数

	自己学習	進路決定	集団活動	健康維持	同輩	(全体尺度得点)
自己学習	1					
進路決定	0.78***	1				
集団活動	0.55**	0.57**	1			
健康維持	0.63**	0.84***	0.68**	1		
同輩	0.31	0.56**	0.62***	0.72**	1	
(全体尺度得点)	0.82***	0.9***	0.82***	0.91***	0.73**	1

表2 パーソナリティ特性尺度における下位尺度得点の相関係数

	開放性 (O)	勤勉性 (C)	外向性 (E)	調和性 (A)	神経症傾向 (N)
開放性 (O)	1				
勤勉性 (C)	0.31	1			
外向性 (E)	-0.03	0.33	1		
調和性 (A)	-0.13	-0.14	0.29	1	
神経症傾向 (N)	-0.06	-0.35	-0.76***	0.1	1

程度の負の相関を持つことが分かる。外向性とは他人との付き合いで刺激を求める傾向のことであり、このような特性が学校生活における集団活動や協調作業に良い影響を与えていると思われる。また、神経症傾向とは心理的ストレスを受けやすい傾向であることから、この特性と学校生活スキルが負の相関を持つということは、ストレス耐性が強い学生は学校生活スキルが高いことを意味する。表2で示されたように神経症傾向は外向性と強い負の相関を持っているため、神経症傾向が低い学生は外向性が高い。したがって、大学の初年次教育において大学生生活になじめそうにない学生を予めスクリーニングするには、初年次学生の神経症傾向と外向性を測定することは有効であろう。

更に詳細について検討する。学校生活スキルの下位尺度に対しては、開放性が2つの下位尺度（自己学習、進路決定）と中程度の負の相関、勤勉性が2つの下位尺度（集団活動、同輩）と中程度の正の相関、外向性が3つの下位尺度（進路決定、健康維持、同輩）と中程度の正の相関、神経症傾向が2つの下位尺度（健康維持、同輩）と負の相関を持つことが分かった。外向性と神経症傾向については、前述の通り学校生活スキルの全体と関係性を持っているが、これに加え開放性と勤勉性が特定の下位尺度と関係を持っていることは興味深い。開放性とは新奇性や知

的好奇心、多様性を好む度合いを意味するが、これが自己学習や進路決定と負の相関を持っている。一般的には高い開放性を持っている学生は自己学習や自律的な進路決定を行う傾向が高いと思われるが、本研究の結果はその逆を示している。これについての理由付けは2つの可能性が考えられる。1つは日本における学校生活が定型的ルールやモデルを基にした多人数教育を基本にしているため、開放性で表される高い創造性を持った学生は自律的な学修が行えないという日本の教育システムの欠点を示唆しているというものである。これについては、本研究の対象である大学における初年次教育だけではなく、その前段の中学、高校における教育が大きく影響しているためより大きな視点での検証が必要になってくる。もう1つは、大学生活における自己学習や進路決定に必要なものは一般的に開放性で表される知的好奇心や新奇性への選好ではなく、他のパーソナリティー特性である可能性である。例えば表3を見ると進路決定は外向性と中程度の正の相関、神経症傾向と中程度の負の相関を持つ。したがって、進路決定スキルを上げるためには外向性に代表される他者との交流を促するような活動（チームワークなど）を初年次教育科目で積極的に取り入れることに加え、ストレスマネジメントのような他者に対する心理的耐性を上げるようなプログラ

表3 10項目パーソナリティー特性尺度と学校生活スキル尺度の相関係数

	開放性 (O)	勤勉性 (C)	外向性 (E)	調和性 (A)	神経症傾向 (N)
自己学習	-0.67**	0.09	0.24	0.19	-0.22
進路決定	-0.49*	0.02	0.50*	0.22	-0.41 †
集団活動	-0.13	0.66**	0.42 †	-0.2	-0.38 †
健康維持	-0.34	0.25	0.50*	0.16	-0.45*
同輩	0.12	0.47*	0.61**	0.29	-0.52*
(全体尺度得点)	-0.4 †	0.34	0.52**	0.14	-0.45*

ムを取り入れることは有効だろう。

分析 4：初年次教育科目の成績評価の妥当性

これ以降では初年次教育科目の評価の妥当性について考察していく。

まず、初年次教育科目の成績評価の妥当性を検討するために演習課題得点と学校生活スキルの相関を計算した。結果を表4に示す。なお、分析に用いた演習課題は全体のものではなく、全13回の授業のうちの最初のもの（2回目）²⁾と最後のもの（13回目）であり、表4では2回目の演習課題得点、13回目の演習課題得点、2回目と13回目の演習課題得点の合計と学校生活スキル尺度の相関を求めている。最初に演習課題得点の合計から考察する。この合計は、本研究の対象となった初年次教育科目の全体成績評価の代替であるが、表4からは学校生活スキル尺度の全体得点、及び5つの下位尺度のうち3つ（自己学習、進路決定、健康維持）と有意で中程度の正の相関を持っていることが分かる。このことから、初年次教育科目の成績評価は学校生活スキルを基準としたとき、妥当性の高いものであったと言える。なお、この場合において、有意な相関が得られなかった2つの下位尺度（集団活動、同輩）については、主に他者との関わりに関するものである。本研究の対象となった初年次教育科目の授業がコロナ禍の影響

によりオンライン形式で行われ、課題もオンラインシステムからレポートを提出する形式だったことがこれらの下位尺度を成績評価に反映できなかった原因かもしれない。これについては、改めて対面授業が再開されたときに再検証する必要がある。

加えて、2回目と13回目の演習課題得点と学校生活スキル尺度の相関を比較してみると、2回目の演習課題はほとんど学校生活スキルと相関を持っていなかった一方で、13回目の演習課題は全体尺度、下位尺度とも大半のもので学校生活スキルと相関を持った。これについての理由付けは2つの可能性が考えられる。1つは課題内容の違いである。2回目の演習課題は「テンプレート（定型文型）を用いた自己紹介」であり、13回目の演習課題は「目標の設定とそれを達成するためのスケジュールの作成」である。2つの課題は両方とも初年次教育科目の大学生活における基礎の構築という目的に合致した典型的なものであり、初年次教育科目と関係のない特殊な課題を行っていたわけではない。したがって、課題内容の不適切さが相関の違いに影響を与えるとは考えにくい。もう1つの可能性は初年次教育科目を受講した学生の課題実施に対する「慣れ」の効果である。つまり、学生は、授業の初期段階である2回目においては授業目的をあまり理解せず、課題の作成方法になれて

表4 演習課題得点と学校生活スキル尺度の相関係数

	自己学習	進路決定	集団活動	健康維持	同輩	(全体尺度得点)
演習課題得点 (2回目)	0.31	0.18	0.10	0.21	-0.13	0.18
演習課題得点 (13回目)	0.46*	0.58**	0.33	0.53**	0.40†	0.55**
演習課題得点 (2回目+13回目)	0.51*	0.58**	0.33	0.54**	0.32	0.55**

いなかった一方で最終回である13回では授業目的の理解や課題作成方法に習熟し、適切な課題内容を作成できるようになったのである。この説明は過去の同科目を対面で行っていた経験からも整合的である。初年次教育科目の対象者は入学直後の大学1年生だが、初期の授業において彼らは大学のルールや雰囲気慣れることに精一杯で、大学の学修や大学生としての生活様式の確立はなされていないように感じる。一方で1学期授業を通して様々な大学生活の知識やスキルを身につけた後は、1年生も上級生と変わらない態度や行動を示すようになる。すると、初年次教育科目の成績評価は授業の初期における課題のものを取り入れず、後期における課題のものを中心に行った方が妥当性が高いのかもしれない。ただし、このことを検証するには2回目と13回目以外のすべての演習課題得点の分析が必要であり、今後の更なる検証を必要とする。

分析5：大学教員の直感評定の妥当性とパーソナリティー特性の影響

最後に大学教員の直感評定との関係について

検討する。2節で述べた通り、本研究では初年次教育科目の受講者（大学1年生）に対し、心理尺度による調査に加え、オンライン上から入学面接を想定した「本学への志望動機」「大学生活における意気込み」という2つのスピーチを実施してもらい、これを2名の大学教員が「対象となる学生は今後大学4年間で成長するか」という観点で直感評定している。

まず、2名の大学教員のスピーチ課題ごとの評定得点とその合計得点の相関を表5に示す。2名の教員の直感評定は2つのスピーチ課題のほぼ大部分において有意な中程度～高い相関を持っていることが分かる。加えて、2名の大学教員の評定の合計も同様にそれぞれの教員の評定と有意な高い相関を持っている。このことから、直感評定の得点として合計を用いていく。以降ではこれを直感評定得点と呼ぶ。

次に、初年次教育科目の演習課題得点と直感評定得点の関係を分析する。表6のように演習課題得点と直感評定得点の間には有意な相関は得られなかった。有意な相関が得られなかった理由は評定に関する観点の違いかもしれない。つまり、評定の観点が4年間の大学生活全体に

表5 スピーチ課題ごとの2名の教員の直感評定の相関係数

	意気込み (教員1)	志望動機 (教員1)	意気込み (教員2)	志望動機 (教員2)	意気込み (合計)	志望動機 (合計)
意気込み (教員1)	1					
志望動機 (教員1)	0.3	1				
意気込み (教員2)	0.13	0.22	1			
志望動機 (教員2)	0.27	0.48*	0.79***	1		
意気込み (合計)	0.65**	0.33	0.84***	0.75***	1	
志望動機 (合計)	0.32	0.77***	0.66***	0.93***	0.68***	1

渡るものであったため、初年次教育科目のような導入時の科目についての成績を適切に予測できなかったことである。これについては、調査対象となった学生の今後の達成度（成績やクラブ活動、就職の状況）を継続して確認する必要があるだろう。

一方で、「本学への志望動機」「大学生活にお

ける意気込み」という典型的な大学入試面接における設問はパーソナリティー特性と関係性を持つことが示唆されている。表7ではパーソナリティー特性のうち開放性と意気込みの直感評定が負の相関を持つ可能性があることが示唆され、図1では調和性得点を高群－低群に分類した場合、意気込みに関する直感評定得点の平均

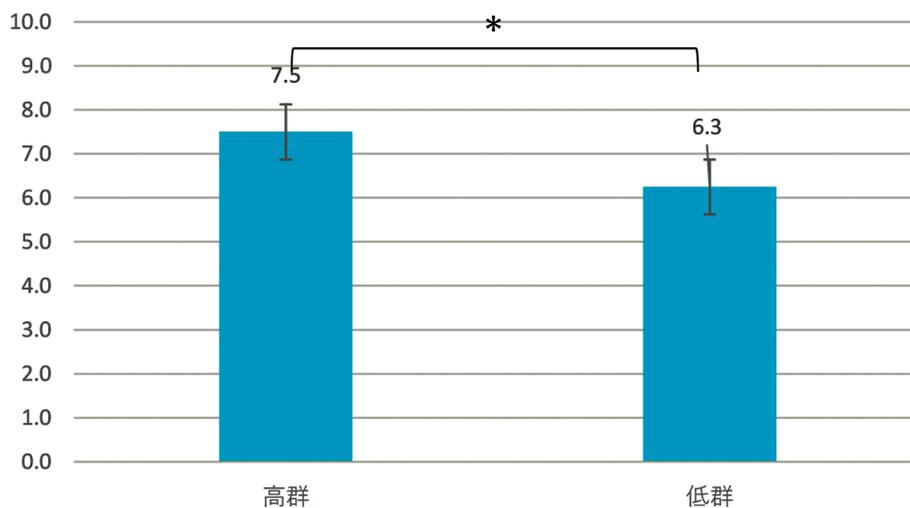
表6 演習課題得点と直感評定得点の相関係数³⁾

	直感評定得点 (志望動機)	直感評定得点 (意気込み)	直感評定得点 (合計得点)
演習課題得点（2回目）	0.07	0.19	0.15
演習課題得点（13回目）	0.27	0.14	0.22
演習課題得点（2回目+13回目）	0.27	0.19	0.25

表7 直感評定得点とパーソナリティー特性の相関係数

	開放性 (O)	勤勉性 (C)	外向性 (E)	調和性 (A)	神経症傾向 (N)
直感評定得点 (志望動機)	-0.18	0.11	0.27	0.10	-0.01
直感評定得点 (意気込み)	-0.37 †	-0.02	0.19	0.26	-0.08
直感評定得点 (合計得点)	-0.30	0.05	0.25	0.19	-0.05

図1 調和性高群-低群別の直感評定得点（意気込み）の平均値の比較



t = 2.21, df = 20, p-value = 0.04

値に有意差が得られている。これらの結果については、より限定的な結果であるため本論においての詳細な考察は行わないが、今後の研究において大学入試の面接評定とパーソナリティー特性の間に何らかの関係性があることが期待される。

分析全体のまとめ

本節では2節で挙げられた調査データに対し5つの分析を行うことで、学校生活スキルとパーソナリティー特性の関係性、初年次教育科目の成績評価の妥当性を明らかにし、大学入試における面接評定とパーソナリティー特性の関係性について示唆を行った。これらの分析から得られた結果は以下の様にまとめられる。

- ① 学校生活スキル尺度は下位尺度間に相関を持つものである一方で、10項目パーソナリティー特性尺度は下位尺度間にあまり相関を持たない。したがって、学校生活スキルは個別の下位尺度と共に全体（合計得点）の傾向を考慮できる一方で、パーソナリティー特性についてはそれが困難で5つの特性を個別に検討すべきものである。（分析1，2）
- ② 学校生活スキルは外向性や神経症傾向と相関を持つ。このために、学校生活スキルを向上させるためにはチームワーク等の協働作業やストレスマネジメントに関する授業を初年次教育科目に取り入れるべきである。（分析3）
- ③ 本研究の対象となった初年次教育科目における成績評価は全体として学校生活スキルに対して妥当性の高いものであった。一方で、授業の初期における課題評価は学校生活スキルに対しての妥当性が低い可能性があり、今後の更なる検証を必要とする。（分析4）
- ④ 大学入試における面接選抜を前提とした直

感評定は初年次教育科目の成績と関連がなさそうである。これは直感評定が初年次だけでなく、4年間の大学生活全体を対象として行われているからかもしれない。直感評定は特定のパーソナリティー特性と関連があることが示唆された。（分析5）

4. 結論と今後の課題

本研究では私立大学経営学部の初年次教育科目を対象として、学校生活スキルとパーソナリティー特性の関係性、成績評価の妥当性を明らかにし、加えてオンライン面接方式を用い、大学入試における面接評定とパーソナリティー特性の関係性を示唆した。また、これらの結果に基づき、大学初年次教育科目における必要な授業プログラム、及び妥当性の高い成績評価方法について考察を行った。これらは今後の初年次教育科目のカリキュラム改善、ファカルティ・ディベロップメントに貢献するものである。

今後の課題は以下の通りである。まず、より大規模かつ広範な範囲で初年次教育科目に関して同様の調査を行うことで、パーソナリティー特性との関係をより明らかにすることである。本研究においては、学校生活スキルとパーソナリティー特性の間に外向性、神経症傾向を中心とした関係性があることを明らかにしたが（表3）、実は統計科目や入社面接で同様の調査を行ったときには勤勉性との関係性が明らかになっている。（森ほか2019, 森ほか2020a, b）この勤勉性と学習成果との関係性は他の研究でもたびたび示唆されており（例えば、Duckworth, 2016, Komarraju, 2011や鶴, 2018）、大学における学校生活スキルや初年次教育科目の成績評価にも影響を与えられるものとして考えられ

るが、本研究では有意な相関を見出すことができなかった。今後は、初年次教育科目において調査対象の規模を広げ、かつ分析対象とする課題の範囲や関連する心理尺度を増やした形で再調査を行うことで、初年次教育科目における勤勉性と学習成果の関係性の有無を再度検証していきたい。

もう1つの課題は調査対象の学生の関連情報の詳細化である。本研究で調査対象者から得た情報は学校生活スキル、パーソナリティー特性などの心理尺度とオンライン面接による直感評定データ、及び演習課題成績である。これらに加え、入学前（高校時）の学習状態や生活習慣に関する調査を行うことで、より初年次教育の活性化や成績評価妥当性の向上に益する有益な知見を導き出せる可能性がある。このような追加調査を経て初年次教育科目や学校生活スキルに影響する要因をより明らかにすることで、今後もカリキュラム改善、ファカルティ・ディベロップメントに貢献することが期待される。

謝辞：本研究の一部は科学研究費・基盤C・20K03157（研究代表者 森一将）の支援を受けている。

注

- 1) これらの結果については、現在内容を取りまとめ、論文を執筆中である。
- 2) 対象となった初年次科目において1回目はイントロダクションであり、授業の概要や全体スケジュール等を説明している。したがって、実際の授業は2回目からの開始となっていた。
- 3) この表においては有意な相関は得られていないことに留意。

参考文献

[1] Costa, P.T., and McCrae, R.R. (1985). The NEO

personality inventory manual. Odessa, FL: Psychological Assessment Resources.

- [2] Duckworth, A. (2016). *Grit: The Power of Passion and Perseverance*. Scribner.
- [3] Gigerenzer, G., and Gaissmaier, W. (2011). Heuristic decision making. *Annual Review of Psychology*, 62: 451-482.
- [4] John, O.P., and Srivastava, S. (1999). The Big Five trait taxonomy: History, measurement, and theoretical perspectives. In L.A. Pervin, and O.P. John (Eds.), *Handbook of Personality: Theory and Research* (pp. 102-138). New York: Guilford Press.
- [5] Kahneman, D. (2011). *Thinking, Fast and Slow*. New York, NY: Farrar, Straus and Giroux.
- [6] Komarraju, M., Karau, S.J., Schmeck, R.R., and Avdic, A. (2011). The Big Five personality traits, learning styles, and academic achievement. *Personality and Individual Differences*, 51 (4): 472-477.
- [7] McCrae, R.R., and Costa, P.T. (1997). Personality trait structure as a human universal. *American Psychologist*, 52(2): 509-516.
- [8] Oshio, A., Abe, S., and Pino, C. (2012). Development, Reliability, and Validity of the Japanese Version of the Ten-Item Personality Inventory (TIPI-J). *The Japanese Journal of Personality*, 21 (1): 40-52. (in Japanese)
- [9] Tupes, E.C., and Christal, R.E. (1961). Recurrent Personality Factors Based on Trait Ratings. Technical Report ASD-TR-61-97, Lackland Air Force Base, TX: Personnel Laboratory, Air Force Systems Command, 1961.
- [10] 飯田順子, 石隅利紀 (2002). 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度 (中学生版) の開発—. *教育心理学研究*, 50, 225-236.
- [11] 飯田順子, 石隅利紀 (2006). 中学生の学校生活スキルと学校ストレスとの関連. *カウンセリング研究*, 39, 132-142.
- [12] 河合塾 (編). (2010). 初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこ

と. 東信堂.

- [13] 鶴光太郎 (2018). 性格スキル 人生を決める 5つの能力. 祥伝社新書.
- [14] 森一将, 橋本貴充, 大江朋子 (2019). 面接試験における直感評定の妥当性評価と評定に影響を与える要因の検討. 日本行動計量学会第47回大会紀要.
- [15] 森一将, 橋本貴充, 大江朋子 (2020a). 入社試験における直感評定の妥当性評価と評定に影響を与えるパーソナリティー特性の検討. 日本行動計量学会第48回大会紀要.
- [16] 森一将, 河合美香, 橋本貴充, 大江朋子 (2020b). オンライン面接試験における直感評定の妥当性評価と評定に影響を与える要因の検討. 2020年度統計関連学会連合大会紀要.



Journal of Public and Private Management

Vol. 7, No. 4, March 2021, pp. 1-11

ISSN 2189-2490

Some evaluations of validity in first year experience program of Japanese university

Kazumasa Mori*

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

✉ morik@bunkyo.ac.jp

Taka-Mitsu Hashimoto**

Research Division, the National Center for University Entrance Examinations

Tomoko Oe***

Faculty of Liberal Arts, Teikyo University

Received. 31. January. 2021

Abstract

In this study, we examine validity of first year experience (FYE) program of Japanese university using some psychological trait like school life skill and personality trait. Additionally, we also focus on online admission interview and analyze relationship between evaluation of the interview and the psychological traits. Consequently, we found that the evaluation of the FYE program was valid and that some personality trait affected the evaluation and school life skill.

Keywords : first year experience (FYE), program, school life skill, personality trait, validity of evaluation

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, JAPAN

Tel +81-467-53-2111, Fax +81-467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

経営論集 Vol.7, No.4

ISSN 2189-2490

2021年3月31日発行

発行者 文教大学経営学部 石塚 浩

編集 文教大学経営学部 研究推進委員会

編集長 森 一将

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL : 0467-53-2111 FAX : 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>